
BLEACH ~ 母親を失った少女 ~

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH〜母親を失った少女〜

【Nコード】

N8700Y

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

母親を虚^{ホロウ}に殺された少女、白崎 茜は死神となり虚退治^{ホロウ}をすることに。

第1話

空座町の一角。

一人の少女、白崎しろさき 茜あかねが虚ホロウに追いかけていた。

（何なの、この化け物！？）

茜は全速力で走り、虚を撒いた。

「はあ……はあ……、何だったのかしら？」

茜は背後を確認すると、「もう追ってこないわね」と言っ
て帰路に就いた。

家に帰り着き、中に入る茜。

「ただいまー！」

しーんとしている。

「お母さん！ 居ないの！？」

靴を脱いでリビングへ移動する茜。

そこには倒れている母と死覇装という黒い着物を纏い、斬魄刀を
持ったアフロの男、車谷くるまたに 善之助ぜんのすけの姿があつた。

「もう手遅れだな……」

「何が手遅れだ！？」

茜は車谷を蹴り飛ばした。

「どわ！？」

壁に顔面からぶつかる車谷。

「お主、私が見えるのか？」

「見えなきや蹴らないわよ！ で、この状況は何！？」

「どうやらお主の母親は虚ホロウに殺やられたみたいだな」

「ほろっ？」

「悪霊のことだ」

「そ……そんな、お母さんが悪霊に殺されるなんて！」

茜はその場に崩れ、泣き出した。

「お嬢さん、敵かたきを討ちたいか？」

「討てるの？」

「お主が死神になればな」

「しにがみ？」

「死神とは、霊界・ソウル・ソサエティ尸魂界内にある護廷十三隊という組織に所属しており、迷いし霊・プラス整を、尸魂界に送ったり、現世を荒らす悪霊・ホロウ虚から現世を護り、尸魂界と現世にある魂魄こんぱくの量を均等に保つことが役目の調整者のことだ」

「へえ、それで、どうすれば死神になれるの？」

「うむ、その前にだ」

「???」

車谷は茜を突き飛ばした。

その直後、壁が壊れ、先程茜を襲っていた虚ホロウが現れた。

「ピギヤー！」

ホロウ虚は車谷を殴り飛ばした。

「ぐはっ！」

ホロウ虚が破壊した壁とは逆側の壁に激突する車谷。

「アフロ！」

茜は車谷に駆け寄った。

「今の攻撃でかなりのダメージを受けたみたいだ」

車谷は覚束無い足取りで立ち上がる。おぼつか

「どうやら立つのだけで精一杯だな。後はお主に任せるしかないみたいだ」

車谷は斬魄刀斬魄刀の刃先を茜の腹部に突き刺した。

その瞬間、茜が背中に大刀を背負った死霸装の姿に変わる。

「ちよっ……何？ 格好が変わったわよ？」

「そんなことはいいいから虚ホロウを」

ホロウ茜は虚の仮面に巨大な斬魄刀を突き刺した。

ホロウ虚は悲鳴をあげて消滅した。

「で、どうすれば戻れんの？」

第2話

白崎家、茜の部屋。

「お母さん！」

そう叫ぶと同時に目を覚まして起き上がる茜。
体を改めると、寝間着姿になっていた。

（元に戻ってる）

茜はベッドから降りると空座第二高校の制服に着替えた。

「さてと、ご飯、ご飯」

茜は部屋を出て、階段を降りて一回へ行き、キッチンに入って朝食の仕度を済ませ、食卓で食事を始めた。

ガチャ、とドアが開いて中年男性が入ってくる。

彼は白崎 新一。茜の父親である。

「おはよう、お父さん」

「ああ、おはよう」

「お、今日も美味そうだな。てか、一人分多くないか？」

「あ！ お母さんの分も作っちゃった！ もう居ないのにね……」

「突然死なんて……父ちゃん寂しい」

「御馳走様」

食事を終えた茜は鞆を手に玄関へ向かった。

「行ってきたーす！」

ドアを開け、外に出て学校へ向かう茜。

途中、茜は車谷に会った。

「アフロ」

「アフロではない。車谷 善之助だ」

「で、何の用？」

「今から来て欲しい所がある」

「来て欲しい所？」

「こっちだ」

車谷は茜を浦原商店へ案内した。

「浦原商店？」

「いらつしやいませえ！」

下駄に帽子の男、浦原 喜助が現れた。

「紹介しよう。浦原商店の店長で浦原 喜助さんだ」

「初めまして、白崎 茜です」

茜はそう言ってお辞儀をした。

「貴方、死神ですね」

「何言ってるんですか、人間ですよ」

「貴方の魂魄が死神化しているんですよ」

喜助はそう言っ手している杖で茜の額を突いた。

その瞬間、死覇装姿の茜の魂魄が肉体から飛び出した。
倒れる茜の肉体。

「何？ 私、体外離脱しちゃった？」

茜は肉体を揺さぶった。

「大丈夫か、私？ てか、どうすれば戻れんの？」

「肉体に重なれば元に戻れますよ」

茜は肉体に重なり、霊体がその中に入った。

立ち上がる茜。

「あ、戻った」

「白崎さんにはこれを渡しておきましょう」

喜助はそう言っ懐から代行証を取り出し、茜に渡した。

「これは？」

「代行証です。虚が現れて死神化する時にこの代行証を体に当てて下さい。肉体から魂魄が飛び出します」

「なんだかよく分からないけど、ありがとございます」

茜はお辞儀をすると、「それでは」と、浦原商店を後にした。

第3話

空座第二高校の校門を駆け抜ける茜。

「遅くなっちゃったわ」

昇降口に入り、下駄箱で上履きに履き替えて一年A組へ。
教室へ入ると同時にチャイムが鳴る。

「セーフ！」

茜は席に着いた。

代行証が「ホロウ」と鳴る。

（何かしら？）

茜は代行証を取り出した。

（ホロウって聞こえるけど、^{ホロウ}虚が出たのかしら？）

その時、車谷が現れた。

「茜、^{ホロウ}虚だ」

「どこに出たの？」

「場所はこの学校の屋上だ。死神化するんだ」

茜は代行証を体に当て、死神化して屋上へ向かい、^{ホロウ}虚と対峙した。

「やあ！」

^{ホロウ}虚を巨大な斬魄刀で切りつける茜。

「頭に刀を突き刺すんだ！」

茜は車谷の言葉に応えて斬魄刀を^{ホロウ}虚の頭に突き刺した。

一撃必殺。^{ホロウ}虚は消滅した。

「初心者にしてはなかなかやるじゃないか」

「剣道やってるから」

茜は教室に戻った。すると……。

「私の体がない！？」

「どうやら勝手にどこか行ってしまったみたいだな」

「勝手にって何で！？」

「義魂丸を飲ませたんだ」

「ぎこんがん？」

「丸薬の形状をしていて肉体に入った時のみ擬似人格を持つ魂魄として作用する特殊な道具のことだ」

「そんなことより体を捜さなきゃ！」

茜は教室を飛び出した。

「どこ行つたのよ、全く」

茜は学校中を捜し回つたが、体を見つけることは出来なかった。

「どこにも居ないわ」

「ひよつとすると、学校の外じゃないか？」

茜は学校を出た。

そこへ現れる虚。^{ホロウ}

「才前、死神ダナ。食ワセロ」

茜に襲いかかる虚。^{ホロウ}

「あんたの相手をしてる暇は無いのよ！」

茜は飛び上がり、虚を真つ二つに切り裂き消滅させた。

「私の体ー！」

茜は着地と同時に走り出す。

「あ、居た！」

茜は屋根から屋根へ飛び移る肉体を見つけた。

「ふっ！」

茜は建物の屋根にジャンプで上り、肉体の後を追う。

「ちよつと待てー！」

振り返る肉体。

「なっ！」

逃げる肉体。それを追う茜。

「何で逃げるの！？」

「やっと手に入れた自由なんだ。捕まつてたまるか！」

「待ちなさい！」

茜は全速力で走って追い付き、肉体を捕まえると代行証を使って義魂丸を取り出した。

「手間かけさせて……」

そこへ駆けつける車谷。

「義魂丸は？」

茜は車谷に丸薬を渡した。

「これは改造魂魄！？」
モッド・ソウル
ソウル・ソサエティ

「尸魂界で作られた尖兵計画の一環として作られた対虚用の戦闘用義魂丸だ。これは早急に処理せねば」

「待つて」

茜は車谷から義魂丸を奪取した。
だつしゅ

「それは！」

「これ、私にちょうだい？」

「いや、しかし……」

「廃棄はさせないよ」

その時、茜は義魂丸から「ありがとう」と聞こえた気がした。

「アフロ、これは貰っておくね」

茜は自分の肉体に入り、義魂丸を懐にしまった。

第4話

下校時間、茜が校門にやってくると、「白崎」と、クラスメイトの男子に声をかけられた。

茜は立ち止まって振り向く。

「何？」

「一緒に帰らないか？」

「断る」

「え！？」

「ごめんね。一人で帰りたいの」

茜はそう言って帰路に就く。

途中、^{プラス}整の霊を見かけた。

霊は^{みすほ}見窄らしい姿の男で、辺りを行ったり来たりしていた。

茜はその霊に声をかけた。

「どうかしたんですか？」

「僕が見えるんですか？」

「見えます」

「はあ、良かった。やっと見える人に会えた」

「で、どうしてうるうるしてたんですか？」

「ああ……実は僕、直ぐその交差点で車に撥ねられて死んでしまったんです。それで、どうしたらいいか分からなくて……」

「分かりました。貴方を行くべき場所へ導きましょう」

茜は代行証を体に当て、死神化した。

斬魄刀の柄を霊に当てる茜。

すると、霊は光に包まれて消えた。^{ソウル・ソサエティ}尸魂界へ送られたのである。

茜は肉体へ戻り、再び帰路に就いた。

家に帰り着き、中へ入る茜。

「ただいまー」

父、新一が玄関までやってくる。

「お帰り」

「お父さん、仕事は？」

「今日は休みなんだ」

「そうなんだ」

茜は靴を脱ぎ、階段を上っていく。

二階に着き、自分の部屋へ入る彼女。

部屋の中には車谷が居た。

「私の部屋！」

「あー、すまんすまん。勝手にお邪魔させてもらった」

「出て行け！ 今すぐ！」

「そう堅いこと言わないで」

「で、何の用よ？」

車谷は懷からライオンの縫いぐるみを取り出した。

「これを渡そうと思ってな」

「何これ？」

「こいつの口の中に義魂丸を入れてみなさい」

茜は義魂丸を取り出し、縫いぐるみの口の中へ入れる。
すると縫いぐるみは動き出した。

「やあ、茜！」

「人形でも動くんだ。しかも喋るし」

「昨日は助けてくれてありがとうね」

「うん。所で貴方、名前は？」

「無い」

「無いのか、そっか……って、無いの！？」

「うん。茜、名付け親になってくれる？」

「そうね……じゃあモモってのはどうお？」

「モモか。いい名前ね」

「それじゃあ私は帰るぞ」

そう言って車谷は窓から出て行った。

第5話

日曜の朝。

目を覚まし、起き上がる茜。

「眠い」

目覚まし時計を確認する。時間は午前六時半だ。

（眠いけどご飯作らなきゃ）

茜は部屋を出ると、一階に下りてトイレを済ませ、洗面所で顔を洗い、台所に移動して朝食を準備する。

やがて朝食が出来上がり、食卓に並べられると同時に新一がやってくる。

「お、今日も美味そうだな」

席に着く新一。

それに続いて茜も座り、二人で朝食を食べ始めた。

その時、代行証が「ホロウ、ホロウ」と鳴り出した。

茜は懷から代行証を取り出す。

「どうした、茜？」

（お父さんには聞こえてない？）

「な、何でもない」

茜は代行証をしまい、朝食を食べ尽くし、食器を片付けて二階へ行き、死神化すると、窓から外へ飛び出す。

（虚はどこ？）

茜は霊圧知覚で虚の居場所を探り、空座公園へやってきた。

そこではオレンジ頭の死神、黒崎一護が虚と戦闘していた。

「月牙……天衝！」

一護を黒い斬撃波を飛ばして虚を真つ二つにし消滅させた。

「あのー」

茜は一護に声をかけた。

振り返る一護。

「誰だあなた？」

「あ……白崎 茜です。って、人に訊く前に自分から名乗りなさいよ！」

茜は一護の顔面に回し蹴りを放った。

「うおお！？」

間一髪で避ける一護。

「危ねえだろ、いきなり！」

「貴方、名前は？」

（聞いてねえし……）

「俺は黒崎 一護だ」

「プフッ、苺だって」

「苺じゃねえ、一護！ 一等賞のーに守護神の護だ！」

「分かってるわよ、苺ちゃん」

「しばくぞてめえ……。で、あなた見かけねえ顔だけど、ソウル・ソサエティ尸魂界から来たのか？」

「残念。私は死神代行よ」

茜は代行証を一護に見せた。

「俺と一緒にかよ」

「一護も代行なの？」

一護は代行証を取り出した。

「代行同士仲良くしましょうね。それじゃ」

茜は去っていった。

（あいつ、ホロウ虚退治に来たのかな）

第6話

ウェ「ムンド

虚圏。

「一体の破面が虚を捕食していた。」

「この魂も食い飽きたな。現世の人間でも食うか」

破面は黒腔に入り、そこを通って現世へとやってきた。

降り立ったのは空座第二高校の屋上。そこには茜の姿があった。

破面は茜へと近付く。

「美味そうな奴だな。食わせろ」

破面が茜に手を伸ばした刹那、彼女は飛び退いた。

（胸に孔……虚か？）

「何だお前、俺が見えんのか？」

「あんた虚？」

「だからどうした！」

破面は斬魄刀を手に茜へ襲いかかった。

ひらりとかわす茜。

「それは斬魄刀！？」

「お前死神か？」

「死神代行、白崎 茜よ」

茜は代行証で死神化し、背中の鞘から大刀を抜いて切りかかる。

破面は斬魄刀で茜の大刀を弾き飛ばした。

（しまった！）

弾け飛んだ茜の斬魄刀が地面に突き刺さる。

「俺の勝ちだ」

破面がニヤリと笑みを浮かべた刹那、茜が瞬歩で斬魄刀の下に移

動してそれを手にした。

「私が負けるか！」

茜は斬魄刀を振るって斬撃波を飛ばしたが、しかし、破面にひらりとかわされてしまった。

（何！？）

「どうした、もう終わりか！？」

アランカル
破面は茜を斬魄刀で切り裂いた。

「ぐはっ！」

倒れる茜。

（どうしよう……、勝てない……）

「霊力の源である鎖結さけつと魄睡はくすいを破壊した。お前はもう戦えない。次に目が覚めた時はただの人間だ」

アランカル
破面はそう言つと、虚圈ウエコムンドへ歸つて行つた。

浦原商店。

茜は居間で目が覚めた。

テッサイが茜の上に跨っている。

「ぎゃああああ！？」

茜はテッセイを足で退かした。

「店長、白崎殿がお目覚めになりましたぞ！」

テッサイの言葉に応えて、浦原がやってくる。

「あ、浦原さん。ここは？」

「私の店です。白崎さんは空座第二高校の屋上に倒れていたんです

よ」

ソウル・ソサエティ
「尸魂界じゃないんだ」

「貴方はまだ死んじやいけませんよ」

「そうだ！ 死神の力は！？」

「無くなってます」

「どうすれば取り戻せるの？」

「取り戻したいですか？」

「当たり前じゃない。お母さん殺した虚ホロウを倒すんだから」

「分かりました。では、三日後にここへ来て下さい」

浦原は懷から錠剤の入った瓶を取り出す。

「傷の治療薬です。これを飲めば直ぐに治りますよ」
茜は瓶を受け取ると、浦原商店を後にした。

第7話

浦原商店の地下にただっ広い空間があった。

「空座町の地下にこんなのがあったなんて知らなかった」

茜はその空間を見て感嘆している。

「それでは、始めましょうか」

浦原は杖で茜の額を突き、肉体から魂魄を押し出した。

「どわ!？」

茜は肉体から離れて吹っ飛んでいき、因果の鎖が伸びきった所で止まって地面に落ちた。

「痛い!」

茜は立ち上がると同時に駆け出し、「いきなり何するのよ!？」と、浦原に跳び蹴りを浴びせた。

「痛い!」

地面に転がる浦原。

だが、浦原は直ぐに立ち上がった。

「白崎さん、始めると言っただけじゃないですか。まあ、いいですけど。それじゃあ……」

浦原は茜の魂魄と肉体とを繋ぐ因果の鎖を切断した。

「ちよつ、あんた何やってんのよ!？ それ切ったら肉体に戻れないじゃない!」

浦原は無言で指をパチンとスナップさせる。

すると茜の足場に穴が開き、その中へ落ちていった。

「白崎さん、死神になってそこから這い上がってきて下さい。制限時間は七十二時間。ヒントは赤ですよ」

「そんな無茶苦茶な!」

「制限時間をオーバーしたら、貴方は虚ホロウになります。その場合は斬らなきゃならないので」

（這い上がれって言ったって……）

茜は壁を足で登ろうとするが落ちてしまつ。

（どうすれば死神に？）

茜は地べたに座り込んで考えた。

（一体どうやって……）

そうしている内に刻一刻と時間だけが過ぎていき、とうとう三日目になった。

（私、このまま虚ホロウになるのかな？ 虚ホロウになったらどうなるの？）

茜は大の字に横たわった。

因果の鎖が侵食を始める。

「なっ！？」

因果の鎖はどんどん短くなっていく。

「何よ！？ 止まりなさいよ！」

そして、因果の鎖は完全に無くなり、茜の胸に孔が開いた。

茜の虚化ホロウが始まった刹那、彼女の意識が別世界へ飛んだ。

そこは高層ビルが立ち並ぶ世界。

茜の正面にはオジサンが立っている。

「誰あんた？」

「私は……だ」

「聞こえない」

「そうか、私の声はまだ届かぬか」

「そんなことより、ここはどこ？」

「私の心の中だ」

「あんた神？」

「斬魄刀だ」

「……？」

オジサンは沢山の箱を出現させた。

「この中に私が入っている。それを見つけ出せ。さもなければお前は虚ホロウになる」

オジサンはそう言う姿を消した。

茜は考えた。

（あの箱のどれかに斬魄刀が入ってるわけか……）

その時、茜の脳裏に浦原の言葉がよぎる。

『ヒントは赤です』

（赤って何のことよ）

茜は集中した。

すると、沢山の霊絡が見えた。その中に一つだけ赤い霊絡があった。

（これか？）

茜は赤い霊絡を掴み、箱を引き寄せた。

（この中に入ればいいが……）

茜は箱の蓋を開けた。

すると、斬魄刀の柄が入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8700y/>

BLEACH～母親を失った少女～

2011年12月5日22時49分発行